

耕縁白豊

NO. 70 西畑亮一

日本の一部10代は、毎年2~3月は受験シーズンと呼ばれる一発勝負の筆記試験の時期に突入しています。さまざまに可能性を秘めたこれからの人生が、これでほぼ決まってしまうかのように錯覚する雰囲気、これまた一部ですっと色濃く漂っていました。行きつ戻りつ、そして山あり谷ありなそれぞれの人生を定型化や直線化するような濃霧なんかすっきり晴れればいいなと思っていた矢先、逆に道険しと思う出来事がありました。2月に実施されたいくつかの大学の入学試験中に、インターネット上で答えを教えてほしいと問題が流れ、すぐに答えらしき返事も書き込まれたようなのです。古典的なカンニングではなかったのと、いったいこの誰がこの事実を学校側に知らせてきたのかなど、憶測が憶測を呼びました。

今の報道のとおりであれば、今回の受験生の行為は、カンニングであってそれ以上でも以下でもありません。だから、ちょっと騒ぎ過ぎですよ。私たちが真剣に騒がないといけないうことが・・・他にあんのとちゃいまっか？と、思わず地こぼで言いたくなります。カンニングの手段に、インターネットに接続できる携帯電話というツールが登場したためオトナたちの妄想は掻き立てられました。しかし、要はカンニングなんです。このように大仰に扱うなら、この受験生と同様に、ネット上に関係情報を流したり、匿名で学校へ連絡してきた人物も特定して、事実関係を明らかにしなければならないでしょう。私たちは、興味本位や自己都合で他者にレッテルを貼りがちです。その上、個人の情報処理能力は偏向と限界があり、情報自体の程度と範囲も高が知れているのです。

大学や試験官には何の落ち度もなく、この受験生1人がとんでもない悪人のように扱われていますが、ほんとうにそうでしょうか。当該私立校の担当者が、今回の件について、「入試制度の根幹を揺るがす行為だ」というような話をしていました。が、「根幹を揺るがす」なんて言うのは、カンニングを形容する修飾語ではありません。私が想像する、まるで官立校のような記者会見にがっかりしました。その官立校では「反省し、更正して」と、発言があったようです。なぜ、こうも日本のオトナたちは、自らを省みず若く弱い者に滅法強いんでしょうか。強い者には媚びるくせに、弱い個人には組織的に好き勝手しているように感じます。大学のあり方、現状の入試制度や監督責任も同時に問われるべきです。試験が必要なのは試験を実施する側にあるのかも、ね。

私たちの社会は、譜面のとおり歌っていない社会です。けっして音痴じゃないけれど、譜面を読んではいない。合唱できないので、共通の譜面で歌っている他のメンバーからは信用されない。ジャズっぽくアドリブ上手かと言えばそうでもなく、力の入れ具合が正反対に外れています。日本国憲法も同じで、私たちの社会の最高ルールでありながら、統治権力をコントロールし主権者に資するよう十分に機能しているとは言い難い。謳われたようには歌われていないのです。けっして無法ではないけれど、肝心な所は肩透かしで放置されたままです。「不斷の努力」と言っても、個々人の持てる時間は短い。「角を矯めて牛を殺す」ようなことのないよう、私たちはほんとうに大事なことに注力しなければなりません。

